

の意義はかゝる茶會の歴史的展開の考察の裡にこそ眞に具體的に求めらるべきものである」として豊富なる史料を美事に驅使し澄徹せる論理を以て明快に叙述して居る。

林屋氏の論文では「劇場構造は演劇の理想を達成せしむる貴い役割を持ち、其の發展の考究は演劇の單なる外部的研究ではなく演劇の生命そのものに關係すべきものを持つて居る。かゝる見地から近世初頭の能から歌舞伎劇への展開を考ふる時我々は所謂「花道」の成立に着目する。扱て歌舞伎舞臺の花道は、通常説かるる如く能舞臺の橋掛とは何等關係を有するものではなくして、實に見物が役者に花を贈るため、新しく歌舞伎舞臺に附設されたものである。而して其の成立は貞享三年以後恐らくは元祿初期に求めらるべきであらう。而して花道には第一には勅使段的性質がある。然しかく言へばとて其は發展的關係に於てははなく、成立過程に於ける精神の一致に就いてある。第二には附舞臺の性質がある。即ち花道は其の機能上附舞臺の後身と思惟される點が極めて多く、附舞臺よりは更に一層親近な關係を舞臺と観客との間に結ぶものである。まことに花道の成立てふ劇場構造の革新こそ、實に我が歌舞伎劇の本質を明らかにも具現したものに他ならぬ」と氏の最も得意とする問題を捉へ、博引傍證、興味ある意見を述べて居るのである。

(A5判二九四頁 昭和十九年四月・京都星野書店發行 價四圓貳拾錢)(石田一良)

中世文化史研究

高瀬重雄 編

國史研究の領域に於いて近時公刊せられるもの、その多くは既に風評の固定した學者の舊業の集成改編に關するものもあらずんば、通俗啓蒙の流に墮する憾なきを得ない間にあつて本書はその表題たる「中世文化史研究」の標榜する處に背かず學術報國の一途に其の赤誠を披瀝し、嚴正なる世の批判に俟たんとした若き學究の力作十三篇を收めたものである。而もそれは往々事に託して企てられる單なる寄せ集めの記念論文集ではなく、略々年輩を同じくする京都帝國大學に國史を専攻した同窓の有志が相集つて、共々に持ち頒ち來つた貴重な體驗を通じて共同態的な生命の記念碑を學界に打ち築き、一には學窓の景致をなし一には後人の標榜ともなさんとしたものである點で特殊な意味を持つことが先づ特筆せらるべきである。而してこの如き論集が時局の特に緊迫を加へた現下に公刊を見たことはそこに意義のまた深いものがあるのである。

さて今、所收論文の標題を示せば

中世に於ける神々の勸請

三社託宣に關する諸問題

吉田兼俱謀計私考

中世に於ける血族信仰の變遷

中世の族的結合

——特に氏族制度との關聯に就いて——

中世思想史に關する一考察

村山修一

内藤 晃

清原 宣雄

本田 善自

福尾猛市郎

前田 一良

儒佛思想分離の傾向

藤谷 俊雄

聖一國師とその時代

和島 芳男

虎關師鍊の國家意識

高瀬 重雄

禪宗主流の成立と其の性格

櫻井 景雄

中世商業史の一齣としての座の組成

澤井 浩三

中世後期に於ける丹波國大山莊の生活

清水 三男

近江須賀神社とその村落

林屋 辰三郎

是等の論文は中世の思想及社會經濟史の問題を主としてあり、各々自由の立場に立ちながら、而も結果に於いて闕らずも諸筆者様の角度より相携へて共通の問題に就き探究の歩を進めて居るの點少くないことが先づ擧げられる、例へば神佛思想の相關に時代精神の動向を察し、中世信仰と倫理意識の消長、集團結合（氏族の村落の）とそれを支持すべき歴史的信仰（神社）との關聯を見るが如きも、中の數篇が之に關與して居てそれを通じて中世文化の具體的把握に至る途を周到に用意して居るの觀がある。斯の如く強ひて意圖せずして斯様な密爾たる連聯がなほも見られることは、筆者の共有したる室生活に自ら胚胎するものとしてまさに本書の一つの特質をなすものと云ふ可きである。

次に各執筆者が何れも學の内外の動向を知る機會を多く惠まれ、従つて歴史學研究の現代に處すべき使命とその方法に關して恒に自覺と反省を新にし得たことは、本書の持つ更に大きな特色として、編者も序言する如く、革新的現代に於ける新なる問題としての「中世」への鋭敏な關心と共に、此處に反映し討究せられてある所以であり、本書をして一昔前の類書とは隔世の觀著しい新

見解の興隆を隨處に認めることが出來、例へば神々の勸請、一方祭神の奉養にも、國民の郷土史への自覺、更には國家全體の歴史回顧の事實が併せ考へられ、（村山・林屋）或は室町文化興隆の基底には地方名主階級が村落文化を擔ひ、其の眞摯なる生活態度が却而よく都鄙文化の向上に寄與する處あつたと云はれ、（清水）武士團の一門主従の一族意識の根柢には氏族制度精神の祖孫親子一體感の發展擴充を、（福尾）三社託宣の形成過程にはその本質として倫理意識の高度の鍊成を見る（内藤）が如く、其等は一々枚舉に遑なしとするも、今日の時代に於いて正に強く意識せられ、方理論上の問題に於ける反省の結果として新に來たものに他ならない。而もなほ前後各篇を一貫して流れるものには斯の精緻なる史實の研究と周到なる綜合、新史料の開拓發見と其の縱横なる驅使を特色とした京都大學國史研究室創業以來の學的傳統とその研究態度が脈々として動き、本書をしてやがてはまた、時代を超えて在らしむべき純粹な學問的審與としての眞價を附與して居ると思ふのである。

最後に尙ほ望んで他日、古代近世に於いても同様なる計畫の成就し、更には第二「中世文化史研究」の誕生をも期待して已まない次第である。

（昭和十九年四月、星野書店刊、A5判、定價六・二五）（堀内他次郎）

支那經濟史概説

加藤 繁著